

○感想文部門

【金賞】

氏名 = 大附 須美子（下呂市）

書名 = 晩年の美学を求めて

著者名 = 曾野 綾子

題名 = 『晩年の美学を求めて』を読んで

曾野作品には若い時から親しんできたが、『晩年の美学を求めて』はその中でも特別な一冊である。この本を初めて手にしたのは三年ほど前のことだったが、いま読み返してみると同じ一冊の本であっても、読む者の心の有り様で読後感の深まりが違ってくることに驚かされる。私は昨年の暮れに夫と死別し、大きな喪失感を埋められないでいた。そんな日々の中で、本棚の奥に眠っていたこの本を思い出して読み返し、以前にも増してその内容に納得し、共感を覚えたのだった。

『晩年の美学を求めて』には“死は解放である”という作者の考えが胸をすくような力強さで述べられている。私にはそのことが驚きであり、よろこびであった。長い病苦の末に旅立った夫も、今は大いなる解放を得ているのだと考えるのは、たいへん心安らく幸せなことであった。

曾野作品の根底にはいつも神の存在が見える。耐えている者、貧しい者、力を持たぬ者たちに向けられる温かな眼差しがある。この一冊も、同じ温かさや賢明なきびしさで、老いてゆく者の生き方を考える二十八章から成るエッセー集である。

「分相応」の章では自立の大切さが述べられる。人は高齢になるほど依頼心が強くなりがちだが、自分のことは人に頼らず生きることを考え、自分の力の範囲で分相応に釣り合いのとれた生活が出来れば晩年は安らかに輝くのだとされる。

「正直など何ほどの美徳か」の章には印象ふかい一節がある。内心はどうあろうとも、明るく生きてみせることは誰れにでも出来る最後の芸術だ。やさしくしてもらいたかったら、まず自分が明るく振舞ってみせることだ。暗い顔をしてグチばかり言って感謝をしない老人には明るい対応は返ってこない。

「カリブ島にて」の章では数々の逸話が紹介されるが、その結びの一文が素晴らしい。“私は職業柄、哀しい恋の結末も、ついにこの世では会えなかった死別の話も聞いてきた。そのいずれの当事者たちも誠実な人でなければ人生のドラマは色濃くならない”よい言葉だと思う。

「人生の薄日」の章では作者自身が、中心性網膜炎と白内障のために視力を失いそうになった経験が明かされる。「発狂しそうな不安と苦しみの中で、その時の唯一の慰めは死であった。死だけが一つの確かな希望であり、恐れることでも悲しむことでもなかった」と述懐される。物言えぬ末期の夫も同じ思いだったのだろうか。そう思う切なさを、作者は見事な言葉で救ってくれる。もし、死ぬことができない運命の人がいたらそれほど悲惨なことはない。この一文が教えてくれた有難い真実であった。『晩年の美学を求めて』は私にとって、ふかい諦観と新たな決意を与えてくれた大切な一冊である。